

# 沖縄市の中心商業地区形成に係わる 本部町出身者の地域的展開

堂前亮平

## 1. はじめに

沖縄社会の特色の一つとして、地域共同体としての性格を強く含んだ意味を持つシマと呼ばれる村落の結束力の強さが挙げられる（佐喜眞興英、1925）<sup>1)</sup>。シマは基本的には地縁、血縁で結ばれた字（あざ）であるが、行政上の町や村、さらに広範囲の宮古・八重山・山原（沖縄本島北部地区）、もっと大きな範囲では沖縄全体をも指すこともある。沖縄本島中部・南部の都市地域で生活している人たちの多くは、沖縄本島北部や離島のシマを出てきた人たちで、シマを共通にする人たちの結束力の強さは、都市地域において、単に郷友会などの社会組織の形成だけでなく、空間的にも如実に投影されている。

筆者はこれまで、そのようなシマを共通にする人たち（以下、同郷人）が、沖縄の都市空間にどのように反映されているかを、沖縄本島北部国頭村佐手や沖縄の離島である宮古の地下町から、那覇市とその近郊に転入してきた人たちの居住地について、若干の考察を行った（堂前亮平、1990）<sup>2)</sup>。そこで明らかになったことは、那覇市の中心市街地周辺部において、同郷人の居住地の塊状分布が見られ、同じ仕事を通じて、居住地もある程度集まっていることを明らかにした。しかし、この居住地の塊状分布も、年数の経過とともに、分散化に向かっている。

本論はこれまでの研究を踏まえながら、沖縄の都市の中心部に視点を置き、都市の中心商業地区に転入してきた同郷人たちが、商業地区形成に如何に係わってきたかを明らかにし、沖縄の都市特質究明の一端に迫ろうとするものである。とりあげた都市は、基地の町として特異な都市を形成してきた沖縄市である。とくに沖縄市の中心商業地区をとりあげ、この地区で商業を営んでいる人たちの中で顕著な本部町出身者に視点を置き、沖縄市中心商業地区形成に本部町出身者が如何に係わってきたかを考察する。

沖縄市は沖縄本島中部地区に位置する。また沖縄市は人口10万人余を有する都市で、沖縄県では那覇市に次いで2番目に人口の多い都市である。沖縄本島中部地区の中心都市であり、沖縄コナーベーションの中で那覇市とともに二眼レフ構造の一つの中心をなしている（堂前亮平、1985、1992）<sup>3)</sup>。沖縄本島中部地区には、広大な米軍基地（以下、基地）がいくつも広がり、それを取り巻いて市街地が形成されている。戦前には豊かな農村地域であったこのあたりに、戦後基地が建設されたことにより、その地域は一変した。基地に出入りするゲートを中心に、いわゆる「基地の街」が形成され、それを核に市街地が拡大していった。その最大の基地の街が、嘉手納米空軍基地を控え、かつてコザ市と呼んでいた沖縄市である。

戦後、突如として生まれた基地の街も、その街をつくった人々は、沖縄各地や奄美からの転

入者のみならず、外国からの移住者も少なくない。沖縄市住民の多くは地元で戦前から居住している住民ではなく、各地から転入・移住してきた人たちが構成されている。そのため沖縄市は異文化が混在した都市を形成しており、沖縄市の都市の特性を沖縄の方言をもじって「チャンプルー（混ぜること）都市」と言われることがある。このように、沖縄市は都市形成の上で、わが国の中では特異な存在である。

沖縄の都市地域へ外国からの移住は当然のこととして、沖縄の各地からの転入もその程度の差はあっても、異質社会に入ることである。そこで多くの異文化接触、適応という過程のなかで、集団のセグレーション（凝離）や分散といった現象を引き起こしている。セグレーションとは、一般的には、異なった生活様式を有する民族集団が、互いに居住地域を異にする現象のことであり、混沌とした異質社会の中に、民族・人種、出身地などを共通とする同質社会を求めて形成されるものである（山下清海、1984）。このセグレーションの強弱は、民族・人種、出身地に係わる内的側面と、それを受け入れる側の諸条件のなかで変化する。

このように異質社会における人間集団のセグレーションや分散等の空間形成に関する研究は、欧米では関心が高く、多くの研究が進められてきた（Jones and Eyles, 1977; Ley, 1983; Boal, 1987）<sup>4)</sup>。筆者は、先にあげた沖縄本島北部や離島から那覇に転入してきた同郷人の居住地の地域的展開の研究のほか、沖縄市において外国人の居住地域と商業地域がどのような過程の中で形成されたかを、沖縄市に居住するインド人を事例として明らかにした（堂前亮平、ダグラス・ドライシュタット、1990）<sup>5)</sup>。なお、沖縄の郷友会組織については、石原昌家の研究があり、その著書のなかで居住地に関する空間についても触れている（石原昌家、1986）。

## 2. 沖縄市の都市形成と中心商業地区

### 1) 沖縄市の都市発達

沖縄本島中部の基地の街の形成は、第二次世界大戦末期の米軍の沖縄占領に始まるが、本格的には1951年から始まった基地建設によってである。すなわち、第二次世界大戦末期の1945年3月26日、米軍は慶良間諸島に上陸したあと、4月1日には、沖縄本島中部西海岸に上陸し、ただちに北飛行場（読谷飛行場）と中飛行場（嘉手納飛行場）を占領した。翌日の2日には美里村（現、沖縄市）、越來村（現、沖縄市）を占領し、美里村字石川（現在の石川市）と越來村字嘉間良には避難民の収容所が設定されて、ただちに避難民の収容が始まった。このように沖縄市の嘉間良に避難民収容所ができたことを契機に、この地区からその後の沖縄市の都市化、さらには沖縄本島中部の都市化が展開していくのである。嘉間良一帯を米軍はキャンプコザと呼んでいたことが、その後のコザ市名の発端となった。米軍は占領地域に次々と収容所を設置していき、避難民を収容していった（コザ市史編集委員会、1974）。

沖縄本島中部の都市化が本格化するのには、1951年から始まった米軍の本格的な軍事基地建設によってである。アメリカの沖縄基地恒久化の背景としては、1949年の中華人民共和国の成立とともに、1948年グロリア台風によって暫定的な米軍基地が全壊となったことである。また、

アメリカは恒久的な基地建設に着手することを決定した後に勃発した朝鮮戦争も、沖縄の基地建設を積極的にすすめる背景となっている。1951年から1953年にかけて、約5000万ドルにのぼるといわれる建設費を投入して、沖縄本島の中部地区で基地が建設されていった。これに伴って、日本本土、アメリカ、フィリピンの大手建設業者、それに沖縄各地や奄美からは、数万人の基地建設労働者が集まってきた。

こうして基地の周辺には、いわゆる基地の街が形成され始めた。基地の街としては、浦添市城間・屋富祖、宜野湾市普天間、沖縄市嘉間良、具志川市平良川、石川市石川などであり、その最大の基地の街が嘉間良から広がった沖縄市である。沖縄本島中部の都市化は、このような基地の街を核に市街地が広がったものである。

沖縄市の都市計画と連動して、最初に軍用地が開放されたのは、米軍の弾薬置場になっていた胡屋八重島原、嘉間良八重原、越来那志原の16万坪の開放で、1949年のことである。この開放地に建設されたのがニューコザと呼ばれた八重島特飲街であり、基地の街の原点でもある。その後、歓楽街はビジネスセンター大通り、諸見、胡屋、照屋に移り、基地の街を象徴するようなバー、質屋、ホテル、テラーなどの飲食店・商店が立ち並んだ。1950年に設立された市場に始まった一般商業地区は、コザ十字路や胡屋十字路に広がった。1950年代半ばの商業地区

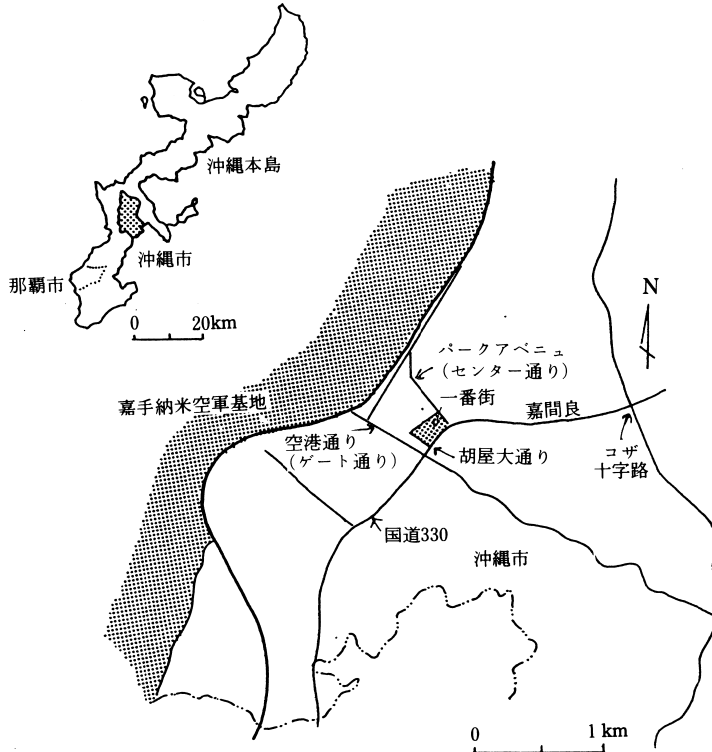


図1 沖縄市の位置と沖縄市の中心部

は前述の2地区のほか、センター商業区、諸見商業区、八重島商業区であった(田里友哲, 1971)。沖縄市が基地の街としての性格を一層強めたのは、アメリカがベトナム戦争に介入するようになってからである。沖縄市の人口は1955年に3万人であったが、10年後の1966年には約2倍の

6万人を突破した。沖縄市には国、県の出先機関が設置され、また1962年には国際大学（1972年沖縄国際大学として宜野湾市に移る）も設置されるなど、沖縄本島の中部地区の中心都市として発展してきた（図1）。

## 2) 沖縄市中心商業地区としての「沖縄市一番街」

パークアベニュー（以前はセンター通り）、空港通り（以前はゲート通り）、胡屋通り、それに保健所通りの各商店街に挟まれた沖縄市一番街（以下、一番街）は、これに隣接するサンシティの商店街を合わせて、沖縄市の中心商業地区の一画をつくっている商店街である。

現在の一番街あたりは、戦後しばらく米軍のモータープール（車輛置場、修理工場）であり、住民の居住地区はセンター通り（現パークアベニュー）と胡屋大通りに沿った部分に制限されていた。その後1951年に一番街あたりが開放され、区画整理が始まった。区画整理は1954年に終了して、1955年から家屋の建築が始まった。一番街に近接する中の町地区の場合は、住居の建築条件として瓦屋根、木造建築、48坪程度といった条件がついていたが、一番街あたりの区画整理地は地主との賃貸契約があれば、特別な条件はなく、だれでも、家屋を建てることができた。家屋は沖縄本島北部で切りだされた木材が使用された。このあたりに、建物が建ち揃うのに4年ほどかかったという。

当時、コザ市役所（現、沖縄市役所）の都市計画課に勤務し、この地区の区画整理に携わった測量技師に、本部町字大浜の出身者がいた。この技師の紹介によって現在の一番街あたりに移り住む人もでて、この地区に本部町出身者が集中してきた一つのきっかけとなった。

## 3. 本部町のシマ共同体

### 1) 本部町の村落

本部町は、沖縄本島北部の本部半島の西部を占め、瀬底島、水納島を含む町である（図2）。1940年に町制が施行され、1947年に北西部を上本部村として分村し、1971年に再び同地域を編入した。

本部町の北西部の備瀬崎一帯や海岸沿いは海成段丘面が発達して、平坦地が広がっているが、それ以外は全体に起伏に富んだ山地となっている。町の東側の伊豆味山中に源を発する満名川は、町のほぼ中央を東西に横切って、渡久地港に注いでいる。

行政字は瀬底、崎本部、健堅、辺名地、大浜、谷茶、渡久地、東、大嘉陽、伊豆味、並里、伊野波、山里、野原、浜元、浦崎、古島、大堂、謝花、北里、嘉津字、具志堅、新里、備瀬、石川、山川、豊原の27である。このうち、謝花、備瀬、具志堅、山川、石川、新里、嘉津字、北里、豊原の9字は1947年から1971年まで上本部村であったが、1971年に本部町と合併した。

伊豆味を中心とする山地の谷間に沿って点在する集落の多くは、近世以後に首里・那覇の士族が帰農し、開墾してできた屋取（ヤードゥイ）と呼ばれる村落である。

本部町においては、7字で共同店があり、シマの共同体を示している（安仁屋政昭他、1983）<sup>6)</sup>。



図2 本部町における字の位置

戦前、本部町（1940年町制）の人口は2.1万人（1935年）で、沖縄県で、那覇市（6.5万人）、平良市（当時町、2.6万人）に次いで多くの人口を有していた。

産業は農業を主とし、サトウキビ、パイナップルを中心に、野菜・果樹・花卉栽培が行われている。渡久地漁港は沿岸漁業のほか、古くからかつお漁の盛んなところであった。

## 2) 沖縄市における本部町の郷友会

沖縄でいう郷友会とは、同じ郷里すなわち同じシマ出身者が相互扶助を最も重要な目的として、移住先で結成した組織である。郷友会の単位は基本的には字であるが、市町村単位もある。さらに、宮古や、八重山地方といった広域の郷友会も設立されている。郷友会はいわば移住先のなかに再現したシマであるといえよう。郷友会の結成の底流には、沖縄の村落共同体がある。各々の郷友会はその設立時期、組織の性格、活動内容において、多様な特徴を有している。郷友会の性格はシマの性格を反映している部分もみられる。（琉球新報社、1980）。

戦前から那覇にはいくつかの郷友会が見られたが、郷友会の結成が活発化するのには、戦後沖縄本島北部や離島から、沖縄本島中部・南部へ人々の移動が活発になってからである。那覇のほかに、当時のコザにも郷友会が結成されたのは、本部郷友会をはじめ、1966年に設立された中部地区宮古郷友会、また同年に名護町、屋部村（現在名護市）出身者によって設立されたコザうらわ会である。他に糸満町（現在市）出身者も郷友会を組織していた（沖縄風土記刊行会、1968）。

本部町出身者全体の郷友会としては、那覇市とその近在在住の郷友会（那覇市近郊在住本部

町郷友会)と沖縄市在住本部町郷友会、嘉手納郷友会がある。沖縄市在住本部町郷友会が結成されたのは、1967年12月9日のことである。郷友会の発足の発端になったのは、沖縄市の市会議員に4名の本部町出身者が当選し、本部町出身者の意気があがったことが考えられる。そのころすでに各字ごとの郷友会ができており、各字単位の郷友会の結束を背景に本部町がまとまったものであろう。郷友会結成大会は琉米親善センターで、320名の参加者を得て盛大に行われた。活動は活発に行われ、主な活動としては会員が亡くなったときの告別式参列、各種見舞い、叙勲・当選祝賀会激励会、敬老会、名簿作成等である。

本部町全体の郷友会の基礎になっているのは、各字の郷友会である。那覇で結成されている場合も同様であるが、戦後コザを中心として、沖縄本島中部地区に転入してきた同じ字民が住居や仕事、その他冠婚葬祭等の相互扶助のために結成されたものである。郷友会として組織化されていなくても、同じ字民どうしは結束して助け合ってきた。そうした中で、仕事の紹介を通じて、職業でも同じ職種につく例が多く見られた。例えば、瀬底出身者は製靴業および靴の販売、刃名地出身者は金物、健堅出身者は衣料品関係に従事する人が多いといった具合である。

沖縄市で結成している本部町の各字の郷友会のなかで、瀬底郷友会について見よう。瀬底島は本部半島の西岸0.6km沖合に位置する小島で、1985年に瀬底大橋が完成し、本部半島と結ばれた。それ以前は、小型フェリーの「瀬底丸」が沖縄本島とを結ぶ足であった。現在島の世帯数267、人口は872人(1990)である。産業はサトウキビとスイカの栽培が主である。

瀬底郷友会は、沖縄市の他に那覇市(本部町瀬底郷親会)と名護市(名護市在住瀬底郷友会)で結成されている。沖縄市の本部郷友会は正式には「中部在住瀬底共援会」(以下、沖縄市の瀬底郷友会)と称し、沖縄市を中心として、北は石川市から南は宜野湾市までを範囲とし、そこに在住している瀬底出身者を会員としている。沖縄市の瀬底郷友会は1952年5月25日に発足した。ちなみに那覇市の瀬底郷友会は、これより3年おくれた1955年に発足している。

沖縄市の瀬底郷友会の目的は、会則によれば「会員の共存共栄並びに相互の親睦を目的とする」となっており、相互扶助がまず第一の目的である。そのための事業として、冠婚葬祭(会員が亡くなった時、告別式参列と香典、結婚式のときは記念品)、生年祝い、病気見舞い(1週間以上入院の時)学事奨励および敬老会(児童生徒に学用品を贈る、敬老者に対して金一封を贈る)新年宴会、本部郷友会の運動会への参加、母村である瀬底で8月に行われる豊年祭への参加、運動会で瀬底の伝統行事であるスーマキの披露である。ほかに、以前はピクニックも行い、郷友会員の親睦を温めていた。

会員の範囲は夫あるいは妻が瀬底出身の場合も会員としている。1987年現在の会員数は150世帯676人で、そのうち、沖縄市に居住している人は114世帯514人である。

瀬底出身者に靴の製靴業・販売業に携わる人が多かったのは、戦後の早い時期にコザに来た大城清福、上間喜明らの瀬底の先輩が米軍人の靴を解体して、日本人向けの靴に作り替え、那覇の市場やコザで店を出して販売したのが始まりであった。その後、こうした靴の手作りの仕事は、先輩を頼って瀬底を出てくるシマの人たちに伝えられ、徐々に増加し、1968年の郷友会名簿によれば、瀬底の郷友会員47人中製靴業11人、靴店2人となっている。その後、本土から

靴が入るようになり、だんだんとすたれていった。現在瀬底出身者で靴店を経営しているのは、コザ十字路の商店街でただ1人となっている。

#### 4. 沖縄市中心商業地区（一番街）と本部町出身者

##### 1) 本部町出身者の一番街への移動過程

前述したように、戦後沖縄の復興が進む一方、県都の那覇市や沖縄本島中部に人々の移動が始まった。この移動を引き起こした原因は、根本的には経済格差によるものである。1956年に沖縄全体の所得指数を100とした場合、沖縄本島北部75、宮古諸島86、八重山諸島80であったのに対して、沖縄本島中部113、那覇130となっており、その格差は大きい（大城常夫、1977）。本部町は、恵まれた農漁村であったが、当時の経済状況の中で、人口の多い本部町は人口を押し出す力も働いていたと思われる。

表1は、現在（1993年）一番街で商業を営んでいる本部町出身者30人（夫が本部町以外の出身で、妻が本部町出身の場合も含めている。夫婦とも本部町出身の場合は1人とし、また2世は除いている）の字別出身者を見たものである。健堅が全体の約半分の13人と際立っており、あとは渡久地4人、並里3人、崎本部2人、大浜、伊豆味、大堂、浜元、東、大嘉陽、山里、辺名地はそれぞれ1人となっている。これを1960年代と比較してみると（表1）、27人中健堅14人、並里、渡久地がそれぞれ4人、瀬底、浜元、大浜がそれぞれ2人、山里、大堂、大嘉陽、伊野波がそれぞれ1人となっており、健堅出身者の増加が目立っている。出身地の範囲をみると、本部町の中で旧上本部村を除いた字となっている。旧上本部村の人は那覇に移った人が多いという。

表1 沖縄市一番街における本部町の字別出身者1960年代と現在（1993年）の比較

また表2は本部町出身者30人が、各々のシマ（字）を出てから、一番街で店を構えるまでの移動過程（移動場所、移動年、仕事と商業の内容）を示したものである。この調査は1993年8月20日～26日に行ったもので、以下の調査結果はこれにもとづいている。

一番街までの移動経路には、3つのパターンが見られる。すなわち①本部町→沖縄市嘉間良・十字路→一番街、②本部町→沖縄市以外→一番街、③本部町→一番街である。この割合はほぼ3分の1つづである。一番街あたりが開放される以前に、本部町を出ている人は3分の2あり、開放を待って一番街に

字	1960年代	1993年
健 堅	9人	13人
並 里	4	3
山 里	1	1
浜 元	2	1
大 堂	1	1
大 嘉 陽	1	1
大 浜	2	1
渡 久 地	4	4
伊 野 波	1	0
崎 本 部	0	2
辺 名 地	0	1
伊 豆 味	0	1
東	0	1
瀬 底	2	0
計	27	30

1993年、聞き取り調査による。

表2 本部町各字から沖縄市一番街までの移動経過

出身字	移動経過
健 堅	1955 → 一番街 (衣料品)
健 堅	1954 → 十字路 (衣料品) → 1958 → 一番街 (衣料品・バッグ) → 1978 → (化粧品・ハンドバッグ)
健 堅	1955頃 → 一番街 (婦人服) → (食堂) → 1958頃 → (アイスクーキー) → 1966頃 → (婦人服)
健 堅	1961 → 東京 (学生) → 1964 → 一番街 (洋裁)
健 堅	1957 → 十字路 (洋服・婦人服) → 1958 → 一番街 (洋服・婦人服)
健 堅	1951 → 石川 (洋裁・和裁) → 1954 → 嘉手納 (親戚の手伝い) → 1955 → 一番街 (和裁) → (洋裁・既製服) 1983 → (小物) 1975
健 堅	1957 → 一番街 (衣料品)
健 堅	1958 → 那覇 (軍作業) → 1960 → 一番街 (靴)
健 堅	1955 → 嘉手納 (軍作業) → 1970 → 一番街 (衣料品)
健 堅	1950 → 十字路 (衣料品) → 1958 → 一番街 (衣料品)
健 堅	1951 → 那覇 → 1951 → 嘉手納 (軍作業) → 1957 → 石川 (ホテルレストラン) → 1972 → 諸見 (ジュウタン・カーテン)
健 堅	1975 → 一番街 (生地) → 1991 → (洋服)
健 堅	1957 → 一番街 (履物) → 1974 → (衣料品)
健 堅	1965 → 十字路 (おでん) → 1968 → 那覇 (雑貨) → 1970 → 一番街 (衣料品)
渡久地	1951 → 中の町 (製材) → 1953 → センター通り (衣料品) → 1968 → 一番街 (衣料品)
渡久地	1963 → 那覇 (看護婦) → 1967 → 十字路 (飲食店) → (雑貨) → (食堂) → 1970 → 一番街 (本)
渡久地	1954 → センター通り (雑貨) → 1963 → 一番街 (化粧品)
渡久地	1962 → 一番街 (衣料品)
並 里	1950 → 十字路 (簡易旅館) → 1953 → 一番街 (衣料品)
並 里	1951 → 嘉間良 (衣料雑貨) → 1954 → 一番街 (衣料雑貨) → 1975 → (呉服)
並 里	1948 → 嘉間良 (婦人服) → 1978 → 一番街 (婦人服)
崎本部	1955 → ? (教員) → 一番街 (和裁) → (呉服)
崎本部	1948 → 嘉間良 (教員-軍作業-タクシー-経営) → 1953 → センター通り (土産物) → 1960 → (映画館)
	1972 → 一番街 (カバン・ハンドバッグ)
大 浜	1955 → ? (公務員) → 一番街 (はきもの) → 1957 → (化粧品・ハンドバッグ) → (かばん)
辺名地	1953 → 十字路 (衣料品) → 1956 → 一番街 (衣料品)
大 堂	? → 那覇 (靴屋従業員) → 1955 → 一番街 (衣料品) → 1974 → (喫茶店)
浜 元	1957 → 一番街 (雑貨) → (洋裁)
東	1952 → センター通り (衣料品) → 1970 → ゴヤ大通り (ふとん)
大嘉陽	1952 → 十字路 (洋裁) → 1973 → 一番街 (洋裁) → 1977 → (洋服・婦人服)
山 里	1968 → 諸見 (雑貨) → 1973 → 中の町 (パン製造) → 1978 → 一番街 (パン製造)
伊豆味	1952 → 本土 (?) → 1957 → 那覇 (会社員) → 1959 → 一番街 (化粧品)

1993年聞き取り調査による (夫が本部町以外の出身で、妻が本部町出身を含む)  
数字は移動年と業種変遷年を示す。



表3 沖縄市一番街で商業を営んでいる本部町出身者で本部町を最初に離れた年

本部町を離れた年	人数(人)
1948	2
1949	0
1950	2
1951	4
1952	2
1953	1
1954	2
1955	3
1956	0
1957	4
1958	1
1959	0
1960	0
1961	1
1962	1
1963	1
∫	
1968	1
∫	
1978	1

1993年調査(不明5人)

移ってきた人が多いことがわかる。

仕事や商業の種類も移動のなかで変わってきている。全体的には雑貨店から専門店への移行が見られるのは当然のことであろう。初めは軍作業員<sup>7)</sup>として、米軍関係の仕事に従事し、その後商業に転じた人も多い。

表3は一番街で商業を営んでいる本部町出身者が最初に本部町を離れた年を示したものである。この表によると、最も早い時期に郷里を後にした人は戦後まもない1948(昭和23)年で、2人ともまず嘉間良にきている。この頃のコザ(当時は越来村)の中心地域は嘉間良やコザ十字路あたりで、郵便局、警察署、治安裁判所、中部工務部などが設置されていた(沖縄風土記刊行会、1968)。1948年に自由企業制度が実施され、これによって嘉間良に市場的な「コザデパート」が創業され、続いて1950年には沖縄本島地区

表4 沖縄市一番街で商業を営んでいる本部町出身者が沖縄市で最初に頼った人および仕事の紹介者

最初に頼った人		仕事の紹介者	
親・兄弟	7人(35%)	親・兄弟	4人(20%)
親戚	6人(30%)	親戚	5人(25%)
同字の知人	3人(15%)	同字の知人	2人(10%)
本部町の同字外の知人	3人(15%)	本部町の同字外の知人	3人(15%)
本部町外の知人	0人(0%)	本部町外の知人	2人(10%)
誰にも頼らない	1人(5%)	誰にも頼らない	4人(20%)

1993年聞き取り調査による。

では最初の市場「コザ中央市場」が設立された。

本部からの移動が最も活発化するのは1950年代前半である。1951年から1955年までの間に移動した人は12人で、全体の約半分にあたる。

また、表4は沖縄市一番街で商業を営んでいる本部町出身者が、本部町を離れてから最初に

頼った人と、仕事を紹介してもらった人を示したものである。この表から明らかなように、最初に頼った人の中で最も多いのは「親・兄弟」7人(35%)、ついで「親戚」6人(30%)となっている。しかし、「同じ字の知人」と「同じ字以外の本部町の知人」がそれぞれ3人ずつとなっており、同郷人を頼っていることがわかる。また仕事を紹介してもらった人についても、「誰にも頼らない」が若干増えているものの、最初に頼った人の割合と同じような傾向が見られる。このように、最初に本部町を離れた人たちは、親戚、兄弟、同郷の知人といった地縁・血縁の絆によって結ばれている。

表5は沖縄市一番街で商業を営んでいる本部町出身者が、一番街に移動した時に頼った人および仕事の紹介者を示したものである。表4との比較の中で大きな相違は、最初に頼った人については、「本部町以外の知人」に頼る人が出ていることと、「誰にも頼らない」人が増えている

表5 沖縄市一番街で商業を営んでいる本部町出身者が一番街に移動した時に頼った人および仕事の紹介者

最初に頼った人		仕事の紹介者	
親・兄弟	3人(15%)	親・兄弟	6人(26.1%)
親戚	8人(40%)	親戚	4人(17.4%)
同字の知人	1人(5%)	同字の知人	1人(4.3%)
本部町の同字外の知人	2人(10%)	本部町の同字外の知人	2人(8.7%)
本部町外の知人	2人(10%)	本部町外の知人	1人(4.3%)
誰にも頼らない	4人(20%)	誰にも頼らない	9人(39.2%)

1993年聞き取り調査による。

ることである。これは一番街に移る前に、すでに沖縄市に来ている人も多く、移った先で知人が出来たことや、土地勘・多くの情報なども得ているためであろう。一番街での仕事の紹介をしてもらった人にいたっては、「誰にも頼らない」が約4割あり、これは一番街に移る前にすでに仕事を持っていて、それを引き続いて行ったためであろう。しかし、基本的には親・兄弟・親戚への依存は大きい。

## 2) 沖縄市一番街における本部町出身者の商業活動

一番街で現在商業を営んでいる113人のうち、49人が本部町出身者かあるいは本部町出身の親を持ち、本人は本部町以外で生まれ育った人である。

図3は一番街における本部町出身者と地元(沖縄市)出身者経営の商店分布を示したものである。この図から明らかなように、本部出身者の商店は一番街の中でもさらに中央部に集まっていることがわかる。これは、前述したように、この地区の区画整理時に本部町出身の測量技師が本部町出身者を紹介したことが一つのきっかけとなっている。しかし、その根底には地元以外の人たちが都市の中心部に入りこめる状況にあったのは、沖縄市の街の成り立ちと深く係

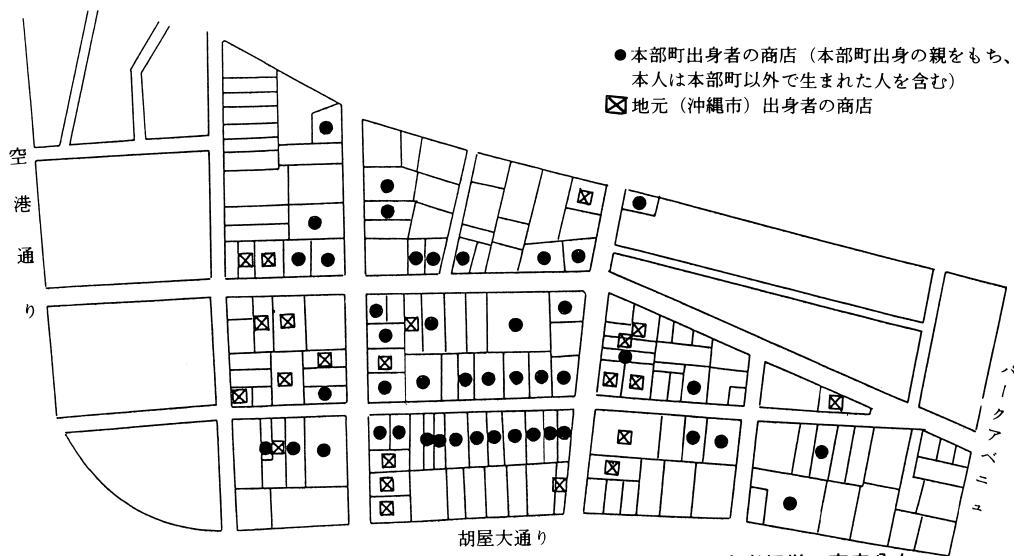


図3 沖縄市一番街における本部町出身者と地元（沖縄市）出身者経営の商店分布



図4 沖縄市一番街における本部町（字別）出身者の商店分布

わっているといえよう。

また、図4は、本部町出身者で一番街で商業を営んでいる人の字別の分布を示したものであるが、同じ字出身者がかたまる傾向は見られない。

図5は、本部町出身者で一番街で商業を営んでいる人のうち、子供、兄弟の商店との関係を示したものである。これからも明らかなように、血縁による同業種の商店の集中を見ることができる。

表6は、本部町出身者（本部町出身の親を持ち、本人は本部町以外で生まれ育った人を含む）と地元（沖縄市）出身者の商店数を種類別に示したものである。この表から明らかなように、本部町出身者の場合、最も多いのは婦人服店の17店で、全体の約40%を占めている。ほかに衣類関係をみると、紳士服4店、呉服3店、衣料品2店、小物類2店、子供服1店、生地1店と

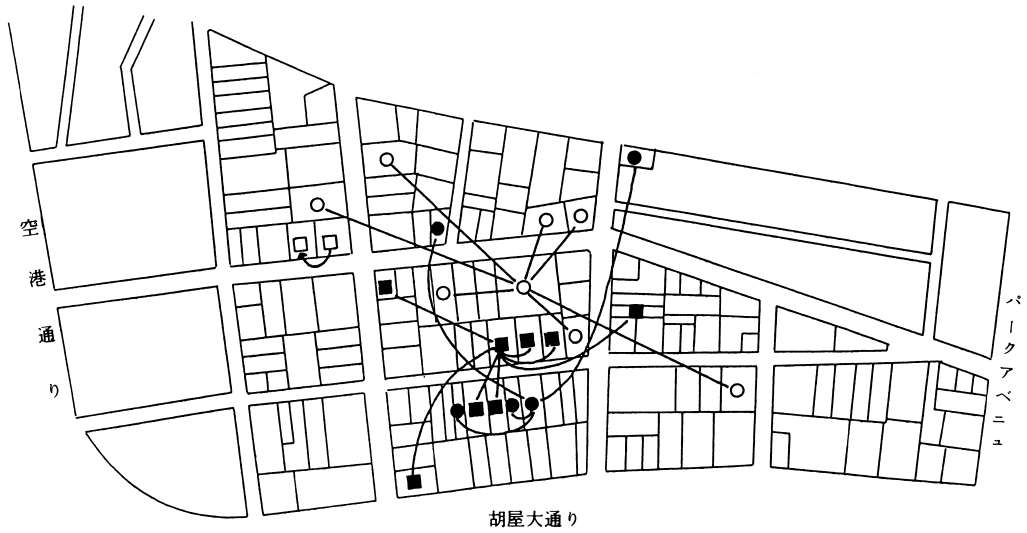


図5 沖縄市一番街における本部町出身者の商店とその兄弟・子供の商店との関連図

表6 沖縄市一番街における本部町出身者と地元(沖縄市)出身者の商店の業種

業種	本部町出身者	沖縄市出身者
衣料品	2店	1店
紳士服	4	1
呉服	3	
婦人服	17	
子供服	1	
小物類	2	
ジーンズ		2
生地	1	
靴	2	1
かばん	2	
玩具	1	1
雑貨		1
瀬戸物		1
ゲーム		1
喫茶	2	4
飲食	2	2
化粧品	3	1
レコード		1
本	1	1
アクセサリ		1
薬		2
瀬戸物		1
理容		1
パン菓子製造		1

1993年聞き取りによる（本部町出身の親を持ち、本人は本部町以外で生まれ育った人を含む）

なっており、婦人服を含めた衣類関係だけで、全体の67%に達している。これに対して地元出身者の店は、衣類関係はわずかに2店で、本部町出身者とは異なっている。地元出身者の店は喫茶店4店を筆頭に多様な種類の店に広がっている。このように本部町出身者は衣類関係に特化しているのに対して、地元出身者は衣類関係以外に従事しているというように、出身地による商店の業種構成は比較的明瞭に分かれている。

### 3) 一番街の再開発と本部町出身者

現在、沖縄市の中心商業地区は、一番街、中央パークアベニュー、サンシティ、保健所通り、空港通り、胡屋大通りの商店街からなっている。その中で、一番街は、中央パークアベニューと空港通り、胡屋大通り、保健所通りに囲まれた、面的な広がりを持つ商店街で、中央パークアベニューや空港通りが外国人を相手にした商店街の色彩を持つものに対して、一番街は地元民を相手にした商店街として発展してきた。しかし、郊外型ショッピングセンターや那覇への消費者の流出など、商業環境の変化はこの地区の商店街を停滞させてきたため、魅力ある商店街に脱皮せざるをえない状況にあった。

1974年4月コザ市と美里村が合併して沖縄市となったのを機会に、それまでのゴヤ中央商店街を「沖縄市一番街」と名称を変更した。そしてこの沖縄市一番街商店街振興組合として法人組合となり、アーケードおよびカラー舗装の近代化施設の建設に向けた商店街の近代化に取り組むことになる。最初に準備委員会が設立され、その後発起人会に切り替わり、1974年5月27日の創立総会で施設の建設が承認され、また発起人会はそのまま理事になった。アーケードおよびカラー舗装は、延長約500m、面積3300㎡の市道で、1975年11月に完成した。工事費は約5億円で、そのうち国、県の高度化資金80%、自己調達20%、ほかに高度化対象外に沖縄市より補助金があった。

沖縄県で初めてこうした商店街の近代化施設が完成したのは、商店街の結束力が強かったことであり、その主力は本部町出身者であった。発起人10人のうち、7人は本部町出身者であった。また当時の市長（夫人が本部町崎本部出身）や議長（健堅出身）が本部町関係者であったため、大きな理解が得られたことも幸いしていた。その後一番街の周りのパークアベニューやサンシティで、アーケードおよびカラー舗装などの近代化施設の建設が進められてきた。

## 5. 結び

本論は沖縄の都市の中心部に視点を置き、都市の商業中心地区に転入してきた同郷人たちが商業地区形成に如何に係わってきたかを考察するもので、基地の町として特異な都市形成をしてきた沖縄市の中心商業地区にスポットを当て、沖縄本島北部の本部町出身者との係わりから考察した。これまで明らかになった諸点を要約すると以下の通りである。

1. 戦後、米軍基地との係わりから生まれた沖縄市は、その基地建設の過程で沖縄各地のみならず奄美、日本本土、アメリカ、フィリピンなど、各地から建設業者や建設作業員それに稼

得を求めて集まってきた人たちが混住している都市である。沖縄市はこのような性質を持った都市であるため、外からの転入者を容易に受け入れられる下地が生まれていた。

2. 沖縄市の中心商業地区は、軍用地の開放によって、変化してきた。すなわち、最初は嘉間良やコザ十字路であったが、現在の一番地あたりが開放となり、都市計画によって住居や商店が建てられてきた。当時一番街あたりの都市計画の測量技師であったのは、本部町大浜出身であったため、この人の紹介によって、一番街に移った人もあり、本部町出身者が集まる一つのきっかけにもなった。

3. 本部町出身者の結束は強く、1967年には「コザ市本部郷友会」が結成され、会員は約1000人を擁した。本部全体の郷友会組織ができる前提になったのは、各字の郷友会の結成である。郷友会は行事を通しての親睦や相互扶助をはかってきた。字の強いつながりは同種の職業集団ともなって現れていた。

4. 一番街で現在商業を営んでいる113人中で、49人が本部町出身者かあるいは本部町出身の親を持ち、本人は本部町以外で生まれ育った人である。後者を除く本部町出身者30人のうち、約半分の13人は健堅出身で、他は3人以下で、健堅が顕著である。

5. 本部町を出て一番街までの移動経路には、①本部町→沖縄市嘉間良・十字路→一番街、②本部町→沖縄市以外→一番街、③本部町→一番街の3つのパターンが見られるが、その割合は3分の1ずつである。

6. 郷里を離れて最初に落ち着いた土地で、最初に頼った人は、親・兄弟、親戚の割合が多い。また仕事の面でも最初に世話になったのは親・兄弟、親戚の割合が多い。しかし同郷人に世話になった人も少なくなく、地縁・血縁関係が濃密である。一番街に移って商業を営むときに頼った人は、郷里を離れてから知合った人もあるが、大きな割合を占めるのは、親・兄弟、親戚それに同郷人である。

7. 一番街のなかで、本部町出身者の商店は、商店街の中ほどに集中している。また扱っている商品は衣類関係が全体の67%を占め、地元（沖縄市）出身者とは分かれている。

8. 1975年に一番街のアーケードおよびカラー舗装の近代化施設が完成したが、沖縄でこうした施設がいち早く完成したのは、商店街のまとまりが強かったことが挙げられる。その主力になったのは、本部町出身者で、発起人の10人のうち7人は本部町出身者であった。

本稿は筆者が沖縄を離れ、福岡県久留米市に移った後に調査を行ったもので、限られた時間のなかでの調査であったが、沖縄在職中から懇意にしていた方々の協力によってまとめることができました。多くの方々にお世話になりましたが、とくに沖縄市役所粟国安雄氏、瀬底郷友会の大城義雄氏、一番街の玉城嘉蔵氏、荻堂哲夫氏、その他一番街で商業を営んでおられる本部町出身の方々に深く感謝の意を表します。また、時間をさいて調査に協力していただいた浦添商業高校教諭の仲田邦彦氏に記してお礼申し上げます。本研究は平成5年度文部省科学研究費補助金、総合研究（A）「社会集団の変容と新しい社会空間の編成」（代表者：高津斌彰 課題番号 04301092）の一部である。

注

- 1) 現在、沖縄で使用されているシマという言葉は、行政の単位としての意味はなくなっているが、高良倉吉（1985）によれば、古琉球においては最小の行政単位としてのシマがあり、シマをいくつかくっつけて間切を構成していた。近世に入り、シマは「村（むら）」に呼称が変わり、間切・村制度となった。
- 2) 沖縄本島北部の国頭村佐手出身者は、1960年に那覇市において35人を数えたが、その居住地の分布をみると、那覇市の与儀に最も多く集まっており、与儀に隣接した寄宮、国場を併せて全体の半数以上が集まっていた。このあたりは元々の市街地の縁辺部であった。また、大工の仕事に従事している人が約3分の1の13人を数え、職業集団を形成していた。大工に従事している人の居住地の分布をみると、13人のうち9人が棟梁の居住する寄宮付近に集中していた。
- 3) 沖縄本島の南部の糸満市から中部の石川市までは、市街地がほぼ連続した都市地域を形成している。筆者はこの都市地域を沖縄コナーベーションと呼ぶ。沖縄コナーベーションは13市町村で構成され、人口総数は約80万人（沖縄県人口の67%）となっている。
- 4) セグリゲーション（Segregation）研究については、Boal（1987）が従来の研究を整理している。そのなかでセグリゲーションには、居住地のセグリゲーション（Residential Segregation）と活動のセグリゲーション（Activity Segregation）があるとしている。
- 5) 沖縄に居住しているインド人は169人（1988年）で、その居住地は米軍基地に依存したテーラーの仕事と関係することから、嘉手納基地を控えた沖縄市とそれに隣接した北中城村に集中している。復帰前は、ほとんどのインド人はテーラーの会社の従業員であったが、復帰後は独立して、テーラーやギフトショップの店を経営している。その分布は、嘉手納米軍基地の第二ゲートの前の空港通りに集中しており、若干はパークアベニューに見られる。インド人たちは、沖縄インド人会を結成しているほか、北中城村の居住地区である泡瀬にヒンズー寺院を建設して、インド人コミュニティの核としている。
- 6) 1983年現在、本部町における共同店は7共同店あり、そのうち伊豆味は戦前からの字の直接経営の共同店で、具志堅、新里、備瀬、山川、浜元の共同店は、戦後設立された字の直接経営による共同店である。また崎本部は任意による共同店となっている。
- 7) 軍作業員とは米軍に雇用された労働者のこと。軍関係労働組合が結成された後は、米軍基地で働く人々を軍作業員から軍労働者へと意識を高揚させ、「軍作業員」に代わって「軍雇用員」と呼ばれるようになった。

文 献

- 安仁屋政昭・玉城隆雄・堂前亮平（1983）：共同店と村落共同体。南島文化、第5号、165-229。
- 石原昌家（1986）：『郷友会社会』ひるぎ社、172ページ。
- 大城常夫（1979）：沖縄の過疎問題。地域学研究、8、173-184。
- 沖縄市在住本部町郷友会（1975）：『沖縄市在住本部町郷友会誌』、239。
- 沖縄風土記刊行会（1968）：『沖縄風土記全集 コザ市編』沖縄風土記刊行会、240ページ。
- コザ市史編集委員会（1974）：『コザ市史』コザ市、1054ページ。
- 佐喜真興英（1925）：『シマの話』郷土研究社、139ページ。
- 高良倉吉（1985）：首里王府とシマ間切・シマ制度から間切・村制度へ。

沖縄国際大学南島文化研究所シマ研究シリーズ、第4号、17ページ。

田里友哲（1971）：コザ市の都市形成についての一考察。沖縄文化研究、1号、1-47。

堂前亮平（1985）：沖縄におけるコナーベーションの形成と都市構造の変容。立正大学地理学教室創設60周年記念論文集、333-343。

堂前亮平、ダグラス・ドライシュタット（1990）：在日インド人の居住地域形成と異文化接触-沖縄と神戸を比較して-。住宅・土地問題研究論文集、第16集187-200。

堂前亮平（1990）：人口現象からみた下地町の地域特性。沖縄国際大学南島文化研究所編『宮古、下地町調査報告書(1)』、15、1-17

堂前亮平（1990）：沖縄の都市と「シマ」社会。地理月報、377、1-3。

堂前亮平（1992）：沖縄の都市形成と都市化。サンゴ礁地域研究グループ編『熱い心の島サンゴ礁の風土記』古今書院、324ページ。

山下清海（1979）：横浜中華街在留中国人の生活様式。人文地理、31、321-348。

山下清海（1984）：民族集団のすみわけに関する都市社会地理学的研究の展望。人文地理36、312-326。

琉球新報社（1980）：『郷友会』新報出版、329ページ。

Boal, F.W. (1987) : Segregation. Pacione, M. ed.: *Social Geography*. Croom Helm, London, 90-128.

Jones, E. and Eyles, J. (1977) : *An Introduction to Social Geography*. Oxford University Press, Oxford, 273p.

Ley, D. (1983) : *A Social Geography of the City*. Harper & Row, New York, 449p.